

社会福祉法人 佑啓会



佑啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会
〒290-02
市原市今宮 1110-1
☎0436-36-7611
発行者 里見吉英
編集者 三股金利

いのち

知覧の空

古川 弘

何か、旅を好む私が、その地へ赴くことがなかったのが不思議な気がする。熊本へは、三度も足を運んだのに……。それは人に語ることもない私の独善的な心のわだかまりのような思ひもする。あえて私情に惹くこととなるのに。

その地は、鹿児島県の南端に位置する「知覧町」である。特別攻撃隊の発進基地であり、ここから四百三十六人が飛び立ち、そのほかの七つの飛行場から五百九十二人、合わせて千二十八人の若人が二百五十キロ、五百キロの爆弾と共に、弾丸飛雨の中に散華していったのである。十七才から二十才の前途洋々の若者たちの人生は幕を閉じていった。当時、私も二十一才の若輩者である。

一九九七年新春の知覧、特攻隊記念館は、訪れる人達でこたえ返していた。観光気分も止むを得ないと思いつつ、半世紀を過ぎた歴史の遺跡を興味深げに見つめる平和な顔々が私の心を少し空しくした。でも私のような軍歴を持つ者や、戦後の焼土のくらしを経験された人達は、それぞれ感慨深く思われる表情が、そこに現うけられた。

会場には、遺言、血書等々が壁面を埋め、「国に一命を捧げる」などの痛切の叫び一両顧への感謝

「俺が死んだら何人泣くべ」
北海道出身のこの人は人生を一言で凝縮して、私の胸を突き刺した。死に對峙して、すべての人間に語りかけている。無言である筈の言葉が闇の空間から響いているように……。しばし、その場で取りとめない回想が走った。

俺が死んだら何人泣くべ
北海道出身のこの人は人生を一言で凝縮して、私の胸を突き刺した。

- 一、私の体は一片の肉も残らんのが普通です。
- 一、弔いは乾度、軍隊でやつてくれますから家では極く軽く、悲しみと異なり喜びですから間違えぬ様。
- 一、女性、金銭関係はありません。
- 一、特攻隊日誌の裏に書いてある方には、生前の交を謝する手紙を差し上げて下さい。
- 一、私へ下さる金は御両親の隨意ですが、生前の念願たる家の改築へ一部でもご使用下さい。

皆益々力を合せ、朗かに、強く正しく生きられて、皇国民の務を果たされん事を御願ひ申し上げます。(以下略)

この方は、二十二才の陸軍少尉岐阜県出身の青年である。

記念館をめぐる時を刻む間に、私のわだかまりが自覚されてゆくのが……。そしてひとつの遺書の前で、一瞬時間・空間を停止した。

ふるさとの大東京は荒れ狂って焼土に、広島島の死の街にみた地獄。思わず腰の軍刀を握る男。群馬、相馬ヶ原からみた闇を焼きつくす東京の空。僅かな別れの時の停止「死なないで帰らなさいよ」と母の低音の呟き……。

タイムスリップから抜け出すように「知覧」をあとにした。しばし妻とも無言になっていた。「いのち」をそれ程こだわっているわけではないが、命の重みを抱えていることは事実である。

沖縄「摩文仁の丘」の墓標連立の輝きや長崎の豪快な彫像の静かな叫びにも、半世紀の遠い昔を強烈に想起させている。まして、知覧は、私の昭和二十年を強く再確認させる。それだけに、生活の糧としてこの道、福祉に入ってから走った錯覚にとらわれる。何故だ

ろう。それは心のまじわりという平和と背中あわせに、「いのち」を譲るといふ、この仕事の厳しさが拍車をかけたのかも知れない。私の戦後はいつ果てるのだろうか。知覧の冬空は、突きぬけて響か

(佑啓会・理事長)

第一回 ふる里学会
ボランティア講座
飯田 俊男

二月八日、九日の二日間、ふる里学会に於て、市原市社会福祉協議会協力のもと、ボランティア講座が開かれました。市原市内を中心に会社員・主婦・学生ら二十名が参加し、一足早い春の訪れを感じさせる陽気の中実施されました。

この企画は、ふる里学会が行う地域支援事業の一環として、在宅障害児(者)の地域生活に対する日常的なボランティア活動をされる方々を養成することを目的に実施されたものです。

初日は、里見施設長からスライドを交えて講話がありました。障害の原因とその症状、知的障害者福祉の時代の流れ、「精神薄弱」の呼称の問題などの話がありました。

やさしい仲間が生活を変える
新しい生活が未来を変える

二日目、体験学習として在宅で暮らし知的障害者とその家族、約百六十名が参加した研修会・交流会に加わり、午前中はスポーツや散策等各グループに別れてのレクレーション。午後からは、餅つきや模擬店の売り子として活躍していただきました。「熱いから気を付けて。」と気遣う光景はなんともほのぼのとした雰囲気を感じさせてくれました。

在宅支援事業を進める中で「買物のわずかな時間、子供を見てくれる人がいると助かる。」(土日に何時間か同世代の遊び相手がいられると)といった家族の声を良く耳にします。ちよつと手を差し

のべるだけで、家族の肉体的・精神的負担も軽減し施設に預けることをしなくても地域の中で十分生活できる人がいますしそれを望んでいる人が多いことに気付きます。

知的障害者の分野では高齢者福祉に比べボランティア活動やホームヘルパー制度などが立ち遅れているようですが、今回のような企画を重ねる中で一人でも多くのやさしいボランティア(仲間)の方々が地域福祉の大きな担い手として、活躍してくれる時代を期待したいと思ひます。

(地域生活支援事業
コーディネーター)

念がねは後から

橋爪 八重子

四国にお住いで八十才になられる宗教詩人・坂村真民さんの詩に触れてから、私の心の糧としていつも助けていただく言葉です。

今、又念じて行動しなければならぬことが出現しました。不遜なことと思ひながら重い知恵遅れの娘を授かってから、神様も仏様も信じられない私が、なぜか何かを決断しなければならぬ時「念ずることにするのです。何に念ずるか自分でもよく分かりません。神様仏様なのか？そうでない気がします。もしかすると自分自身なのかもしれません。

神様仏様はこんなに不公平なこととはなさらないからと思いたく、いつも恨んでいるからです。二十才になる娘との生活で楽しいこと、思い出深いうれしいこと、うきうきするありがたいこと沢山もらいました。でもそれ以上に悲しくつらく情けなく泣きたいことがいっぱいでした。又数え切れない程みじめで、あわれな場面やお話を聞きました。それは今でも続いています。

私は娘の生きる道を決める大切な節目節目に念じて念じて事を決め現在があります。これまでに失敗はなかったのだと思えることに感謝です。就学前、大宮学園で

の二年間の通園は親娘にとって精神開拓の実験場で大きな収穫をいただきました。小学部は千葉大附属養護を受験しましたが、親も娘も不合格でした。それで出来たばかりの市立第二養護学校で六年間、山あり谷あり涙と笑いの長い年月でした。

てんかんの発作がはげしく始まり小さな細い体に大きな黒い皮のヘルメットをかぶつての学校生活でした。電話が鳴る度また倒れたのでは？とはらはらして白髪が増えたことでした。家から近かったことで中学はこりもせず、千葉大附属養護を受験し運良く入っていたが三年間親娘で必死の義務教育を受けました。よそではとてもまねの出来ない貴重な勉強と体験をさせていただきました。高等部もあり一応受験して進学するのですが、中学部からの方は相当遅れていても殆ど進学出来ました。先生方から「一生の内学校生活が出来るのは後三年間だけだから、恵子さん、学校でも伸びる芽はあるから」とのおすそめを振り切つて私は寄宿舎付の高等部と寄宿舎付大学と意味付けて入所の施設への進路を選びました。預かっていただくための条件にかなうところを捜すのに長い年月がかかりました。それは建物は平屋建、中軽度の方が多く、教育方針が家庭的でゆるやかで、家から車で一時間程の距離等々、そんな施設は今時ないと思われようがありま

した。茨城県鹿嶋郡大野村の中台育

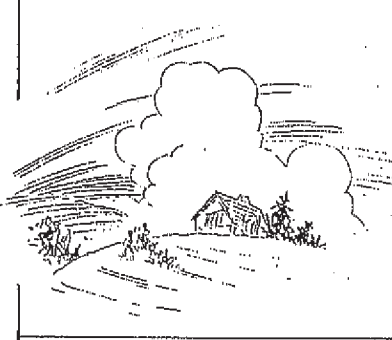
心園でした。

娘はそこで八年間集団生活を体験して三年前家に戻り、只今は家からあけぼの園へ背伸びした就職生活です。中学時代のお友達もいらつしやり、毎日喜々として通園しております。けれども父親は七十才、母親も六十七才。年齢的に次の段階を考えなければなりません。そこで私の「念ずる」ことが不可欠になりました。一番安心出来る方策を立てる時期が目の前に来ているとひしひしと感じられるのです。

どんな時も、はなれることのない重い知恵遅れの娘が家族のくさびの役目を果たし、一人ひとりに生き甲斐を与えて、笑顔をまき散らせてくれています。

この娘のために安穩な生活を願うため「念じつつ花ひらく」まで努力しなければと自分に言い聞かせるこの頃です。

橋爪さんは、学舎のふれあいホーム（生活能力訓練事業）を利用して、研修会・交流会に参加されている方です。



一年坊主が振り返って

渡辺 千賀

「人は歳を重ねる度に月日の過ぎるスピードは速くなり、短く感じられるようになっていくね。」

不安と緊張で学舎の扉を開いたあの日。社会人として、施設職員として歩み始めた今年、めまぐるしく変化に富んだその一年がもう過ぎようとしている。

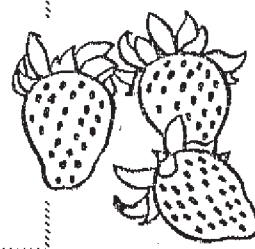
しかし、時の流れのやさしさは振り返って思うこと。実に色々なことをたくさん経験してこれたように思う。今、それを痛感している。

私にとって知的障害者の施設は未知の世界であった。学校で社会福祉の勉強もしてきたが、知的障害者についてはあまりふれられないこともなく、実際に関わる機会もほとんどなかった。だから全てのことが初めてで戸惑うことの方が多く、私の得ていると思っていた知識は所詮、机上の知識でしかなかったのだと思い知らされた。

とにかくはやく慣れよう、覚えようと必死だった。そんな中で行った日帰り旅行は、不安と緊張でいっぱいで何度も何回もレジュメを読み返していたのを思い出す。最大のイベントであった納涼祭は何日も前から準備をし、自分達で共に一つのものを作り上げるという感動を味わった。

随分と慣れ、少しはまわりを見られる余裕ももてるようになった頃の一泊旅行でも、最初の頃の緊張感は薄れることはなく、やつぱり穴のあく程レジュメを読み返しては何か忘れていないか不安になった。しかし、それは元来、私に抜けている所があるからに違いない。このボケッとした所をどうにかしないと頼れる職員にはなれないと常々思っているのだがどうにもならず、私の頭を今でも悩まし続けている。

そして運動会も思い出の一つである。いつもは動きたがらない寮生が生き生きと走っている姿は、今でも胸に焼きついている。そんな驚きと発見が私にとってはとても嬉しく楽しいことであり、日々の生活に喜びと元気を与えてくれる。助け、助けられて生活しているのだと思う瞬間でもある。



編集後記

ここ数年、この季節になると女子職員で館山に薔苳りに出かける。ミルクをけなくても甘い苳苳たちをたらふく食べ、腹ごなしに花摘みをするのである。日頃の行いが良いのか天候が悪くなつたことは今までなく、甘い匂いと目の保養に丸一日をつかいきつてくる。

明日からの仕事への活力とビタミンを補給し、少しでも多く発散できればすばらしいと思いつつ・・・

佑啓二十二号をお届けします。

遠山 貴子